

クラシック音楽公演運営推進協議会は、12月11日、「コロナ下の音楽文化を前に進めるプロジェクト《声楽・合唱における飛沫感染リスク検証実験》」の報告書を発表しました。

この実験については、6月25日付『おんがく広場』第61号でも取り上げましたが、その結果報告が待たれていたところです。実験は9月25-27日、新日本空調研究所のクリーンルームで行われました。

この報告はおそらくこれまでに出版された実験の中では最も壮大且つ緻密なものです。関係者のご努力に敬意を表します。詳細は下記↓のサイトでご覧になれます。報告の結語は以下のとおりです。

◎ マスクなしでの歌唱では、口元と前方50cmでは1 μ m未満のものを中心に他の測定点よりも多くの微粒子が検出された

✓前方2mより1m、側方1mより50cmで、飛沫などを介する感染リスクが上昇することを示唆する結果は得られなかった

✓適切なマスク等の選択と使用により微粒子の飛散量を減少させることが可能である。しかしその程度と使用に伴うデメリットには種類ごとの差や個人差がある。現場の状況に応じて個別に判断する必要がある

✓最終的な目的は「演奏活動に伴い生じる感染リスクの総和を、現実的に達成可能な範囲で最小化する」ことである。それぞれの演奏現場の実情にあわせ、換気や手指衛生、演奏活動以外の時間の過ごし方など、適用可能な対策を適切に組み合わせて全体としてのリスク低減を図ることが望ましい。

さらに、Q&Aの形で具体的な解説をしています。ただし、これは前提としてプロ演奏家を念頭に置いており、アマチュアの場合は各々の環境に応じて他のガイダンス等も参照してほしいとしています。

①合唱団の取るべき立ち位置の間隔は？→**マスクなしの場合、概ね前後2m、左右1m**

②ソリストから客席までの距離は？→**歌唱位置から客席最前列までは水平距離で最低でも3m以上**

精密な実験結果 クラシック音楽公演運営推進協議会 声楽・合唱における飛沫感染リスク検証実験

③マスクを着用すれば歌手間の距離はとらなくて良いか？→**概ね前後1m、左右**

50cm。しかしマスクの形状や材料によって大きく変わる。

④マウスシールドは合唱公演におけるリハーサル及び本番の感染防止に役立つか？→今回の可視化実験で微粒子の拡散が確認され、感染対策としては勧められない。

⑤一番良いマスクはどれか？→不織布、ポリウレタン、歌唱用マスクのうち、**最も良い成績は不織布**。

⑥舞台上のサーキュレーター(空気循環器)は効果的か？→風向を考慮しながら適切に設置することで、換気の補助として有効な可能性がある。

⑦舞台上に加湿器を設置するのは有効か？→有効かどうかは不明、ホール側と要相談。

⑧合唱団の人数「**概ね60人以下**」の根拠は？→《第九》を念頭に置いたため、最低人数の50-60人と前後2m、左右1mの間隔を都内の主要会場の舞台サイズを比較して算出した。

⑨マスクやマウスシールドを着用すれば舞台収容最大限の60人以上で公演できるか？→60人はあくまで目安。一般的には合唱の人数が増えれば増えるほど、感染リスクは上昇する。

⑩影コーラス(舞台の袖や裏で歌う)の配置も舞台と同じか？→歌唱者間の距離は同じ。換気条件は舞台と異なるので、ホール側と要相談。

⑪声楽ソリストと合唱団とオーケストラ団員との距離はどれくらい必要か？→**水平面で2mの距離**が確保されていれば、飛沫などによる感染リスクは低くなる。

⑫PCR検査で陰性証明を得た人だけが参加すれば、安全に演奏・歌唱できるか？→PCR検査は理論的には2~4日毎くらいの頻度で検査を繰り返す必要がある。また、陰性であっても実際には感染していることがある。PCR検査には限界がある。



また、この実験結果に基づいて、同協議会発行の「**クラシック音楽公演における新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドライン**」も12月1日に改訂されています。改訂に際しては、新旧対照表も添えたわかりやすいものとなっています。

